朝日町

人物
朝日町

国学者　橘守部

橘守部は、江戸時代の国学者です。国学とは、古事記や万葉集などの古典を研究することにより、日本固有の生活や精神を理解しようとする学問で、その代表として松阪の本居宣長【→P38】がよく知られています。守部は、1781（天明元）年小向に生まれました。守部の父飯田長十郎元親は、亀崎（川越町）や金井（桑名市）などの村々を管理する大庄屋格で、津の国学者、谷川士清【→P35】の門人であったといわれています。

守部が17歳のとき、一家離散のため江戸に移り、20歳を過ぎてから学問を志すという、当時としては晩学でした。その後、武蔵国幸手（現在の埼玉県幸手市）に移って学問に励み、49歳のとき再び江戸に戻りました。当時の国学界は本居宣長が主流であったのに対し、守部は宣長の学説を批判し、神話の解釈や古典の研究に独自の学説を展開しました。また、守部は多数の著作を残し、多くの門人の指導にあたりました。その業績が認められ、天保の国学四大家に数えられています。

橘守部（群馬県立文書館所蔵 吉田允俊家文書提供）

【→P110＊3】

▪ 三重県出身の他の国学者についても調べてみましょう。

史跡
朝日町

縄生廃寺

縄生廃寺は、江戸時代から「金光寺跡」として知られ、戦前には土取りの際に瓦片が多量に出土したと伝えられています。

1986（昭和61）年9月から翌年3月に行われた発掘調査で出土した軒丸瓦などから、7世紀末から8世紀初頭に造営された奈良時代の古代寺院であることが確認されました。

塔は東西10メートル、南北10.2メートルの基壇（建物の台の部分）上に建てられ、基壇部分は地面を削りだし、瓦を積んだ「瓦積基壇」とよばれる建築方法が施されていました。

心柱が建てられた心礎は、基壇の上面から1.5mほど掘り下げて置かれる「地下式心礎」となっていました。また、出土した3種類の軒丸瓦のうち、奈良県の山田寺や川原寺の軒丸瓦によく似たものがあり、創建時期の判断の決め手となりました。心礎の中心に開けられた舎利孔（小さな穴）から、唐三彩椀をともなう舎利容器（釈迦の骨といわれる「舎利」をおさめるもの）が発見され、日本で最も古い例の一つとして1989（平成元）年に国の重要文化財に指定されました。

唐三彩の容器と出土した瓦（朝日町教育委員会提供）

【→P110＊3】

▪ あなたの住んでいる地域に残っている遺跡について調べてみましょう。

伝統工芸
朝日町

萬古焼中興の祖～森有節～

紫泥の急須や土鍋など、萬古焼は、四日市市の地場産業として有名です。その発祥は、桑名の豪商沼波弄山が江戸時代の元文年間（1736～1740）に朝日町の小向に窯を開いたことにさかのぼります。弄山の没後、萬古焼は一時途絶えましたが、桑名の田町に生まれた森有節が、弟千秋とともに小向の名谷に窯を開き、1832（天保3）年、萬古焼を再興しました。

有節は、急須や土鍋などの成形に特殊な木型を使用し、量産を可能としました。急須の内部には龍が浮き出るように木型にその文様を刻みました。

また、鮮やかな桜色の釉薬の開発にも日本で初めて成功し、世の喝采を浴びました。これらの業績により、有節のつくり出した萬古は「有節萬古」と呼ばれ、「萬古焼中興の祖」として、その名は現在でも語り継がれています。【→P14】

森有節（朝日町歴史博物館寄託資料）

有節作の酒器（朝日町教育委員会提供）

【→P110＊3】

▪ 萬古焼のように、現代も技術が受け継がれている伝統工芸品について調べてみましょう。